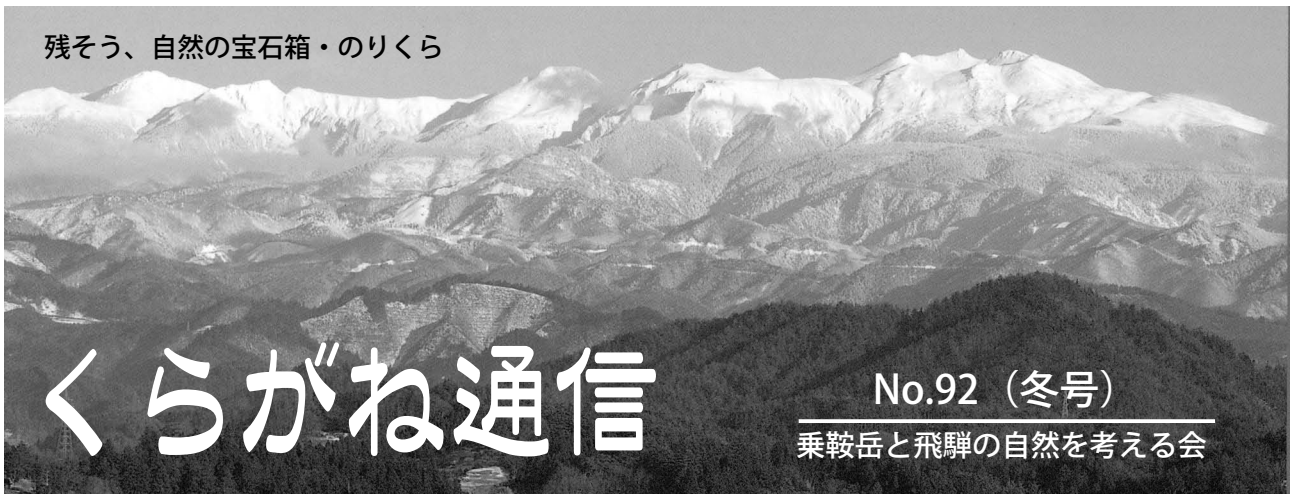


2024 年 1 月 20 日発行
http://iidalaw.net/norikura.html

第 24 回総会・環境講演会

3 月 2 日（土） 高山市民文化会館（2-5）

1. 第 24 回定時総会　15 時 40 分頃～

議題：2023 年事業・決算報告、2024 年事業計画・予算案、その他

2. 環境講演会

「野鳥も人も地球のなかま」

～ 御嵩町リニア残土計画・大阪万博・勇払原野風力事業と野鳥たち ～

13 時開場　13 時 30 分開演～ 15 時 30 分頃まで

講師：大畑孝二さん（日本野鳥の会 施設運営支援室）

サブタイトルにあるように、大畑さんが実際に関わっている日本各地の現状と実践的な活動内容を中心にお話ししていただきます。

年に一度の総会・環境講演会に是非ご出席ください。

なお総会に**出席できない方は**同封の**代理人選任届のご提出**をお願いします。

秋の里山こみちハイク　三仏寺城趾

10 月 1 日（参加者 20 名）

小林洋子

集合時間には雨も止んで、日頃の行いの良い人たちの集まりで出発です。

上野平には縄文時代からの遺跡があったり、たくさんの石仏があり、人々の生活の営みと歴史を感じられる所だと再認識できました。

また、三仏城趾も行ってみたいと思っていた所で、解説して下さる方と共に行けて、すばらしい城趾で感激しました。今回参加できなかった娘や孫を案内してみようと思っています。

帰り道で直井さんの見つけられた「ハナビラタケ」、初めて聞いたり見たりで、何でも出かけないと見ることができないと言うことがわかりました。楽しく有意義な一日をありがとうございました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

井上雅子

あちこちに彼岸花の赤がめだつ。10月最初の日は上野の公民館から始まる。歩きながら考える、充実した一日の印象に残ったことを記してみたい。

上野用水の碑、「天水開耕」と彫られた碑。上野平の広々とした地に向かって気宇壮大の感。黒岩坂、へこき坂、坂にはそれぞれ先人の名付けた名がある、と知れば親しみがわく。

いくつか見た石仏の中でも、へこき坂の不動明王には赤飯、ぶどう、柿、りんごが供えられ、近隣の方々の親しみと敬いの心が思われる。その先の地蔵さまには何の由来も無いけれど、建てた人の想いも偲ばれた。

小丸山古墳を過ぎて、今日のハイライト三仏城趾を訪ねる。馬の背、たて堀、うねたて堀、空堀などの城の防御の説明を伺いつつ、これほどの対策をしても攻め落とされてしまったのだなあと思う。

人の歴史は、戦の歴史。その過程でものすごく多くの無名の人々が殺し殺され、消え去っていく。

人の営みは続き、はかなくしかも愛しいと思いつつ上野平に戻ってくれば、最後に黒い顔をした羊に出会い嬉しかった。

みなさんありがとうございました。

赤飯を　供えられたる　お不動様
やがて咲く　茶の花ゆかし　小径かな
歩み来て　上野平に　赤とんぼ

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

金澤都子

前日からの雨の名残りを忘れたかのような一日。「秋の里山こみちハイク 石仏探訪」に出発です。道端には曼珠沙華が咲き誇り、所狭しと栗の毬が落ちていて「里の秋」を満喫。思わず深呼吸。地蔵菩薩と馬頭観音にあいさつしながら、天水開耕の碑へ。完成当時の喜びに思いを馳せながら、歩く歩く探訪旅。

黒岩道祖神社は、神社合祀により松森神社へ

と統合されたとか。NHK の連ドラ「らんまん」での南方熊楠の名を思い出しながら「なるほど」とひとり言の私でした。

長い傾斜が続き、名前の由来もなんとなく納得させられるへこき坂を通り、飛騨ではもっとも古い三仏寺城跡へ。

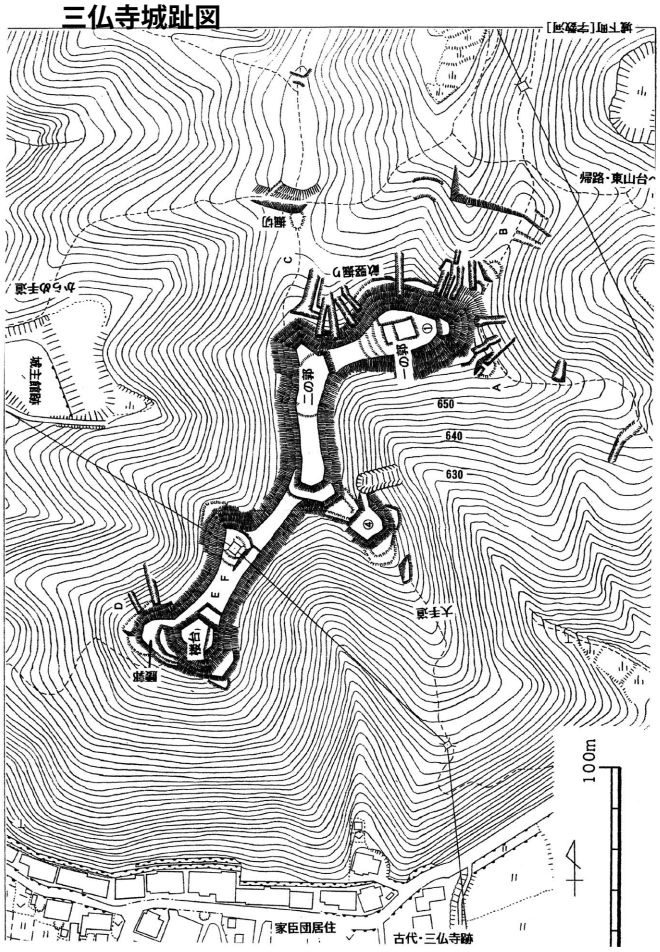
「搦め手」と彫られた石柱や山城の防御や戦略の説明。解りやすい説明を聞きながらの山道の登りは、好奇心がくすぐられる楽しいものでした。馬の背道と呼ばれる細い山道。畝状に竪穴が何本も連なる畝状竪堀群。尾根筋からの敵の侵入は、これによって曲輪には近づけず、城側は、時として５メートルもの長い槍を使ったとか。私の頭の中は、さながら戦国絵巻です。

今は木々が生い茂る城跡・・・・やはり「兵どもが夢の跡」お昼を食べて、のんびり思いを巡らす本丸でした。

会への参加は、まだ数回だけれど、参加しなければ一生出逢うことのない歴史絵巻へ、いつも誘ってもらっています。いくつになっても、「知る」ことの楽しさや驚きは、ほんとにうれしいものです。

今年も心にたくさんの贈り物をいただきました。ありがとうございました。次回も楽しみにしています。

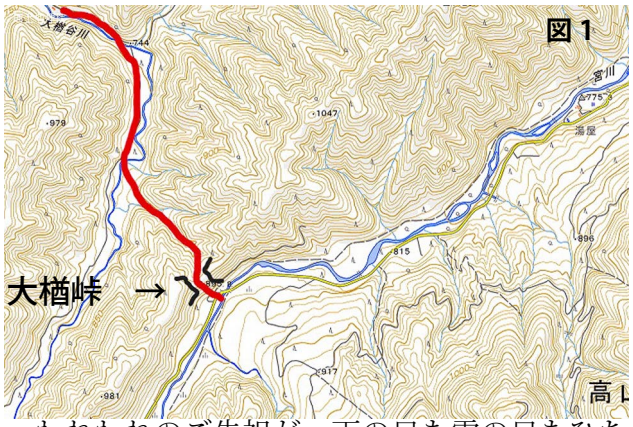
三仏寺城趾図



飛騨の峠【その 18】

木下喜代男

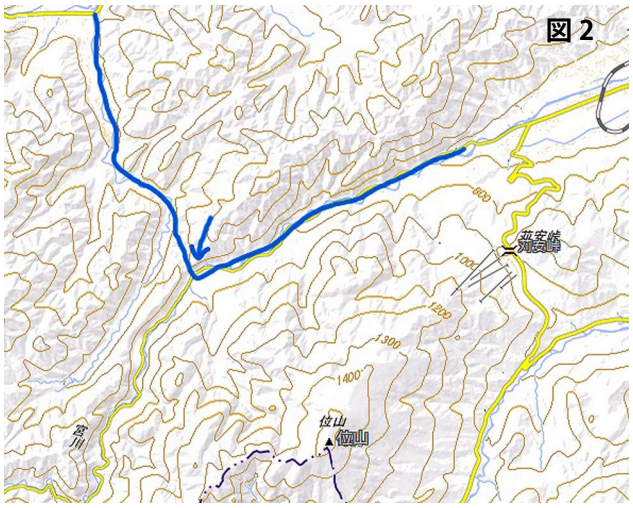
大楢峠ー旧宮村の人が清見の楢谷寺へお参りのため越えた峠



われわれのご先祖が、雨の日も雪の日もひたすら歩いて越えた峠への関心は尽きない。

昭和初期に発行された「大日本帝国陸地測量部作成 5 万分の 1 の地形図」を見ていたら、高山市街地近郊にまだいくつかの峠があった。集落間を結ぶ小さい峠道だ。そのうちの一つが、旧清見村三ツ谷集落と旧宮村を隔てる低い山を越す峠（標高は 895m）。古い文献を見ると、『飛州志』に「宮峠苅安峠大楢峠久々野郷宮村ニアリ」、『斐太後風土記』には「大楢嶺 一里。宮湯屋より三ツ谷村へ越」とあった。宮村では「大楢峠」、一方の三ツ谷集落側では「宮峠」と呼んでいたようだ。（図 1、2）

一之宮町のはずれでスキー場へ行く道と別れ、宮川に沿って西へ進む。久しぶりに入ったら、別荘らしき建物が立ち並び、すっかり様相が変わっていた。今は廃業している旅館「やかた文左」から約 3 キロのところに鱒淵橋があり、地形図では橋を渡って 50 メートルほどの右側



が峠の取りつきになっている。

道端に駐車して入るとすぐにゲートがあり、山裾から右の方へ倒木などで荒れた林道が延びていた。左には「原木低コスト供給対策事業」とやらで新しい林道が敷設されていた。そして山側の林道より少し高い位置に林道に並行して古い石積があったが、これは後で営林署の森林軌道の跡であることがわかった。（写真 1）

ここから山を仰ぐと、青空の下に峠らしき鞍部が見え、これを目がけて入る。（写真 2）急傾斜なので昔のつづら折りの道は流れてしまったようだが、直登のケモノ道らしきものがあったのでどんどん登ると峠に着いた（写真 3）。

三ツ谷側は一面の笹ヤブだが（写真 4）、そのなかに道の形状があったので入ってみる。笹を分けながら左のまき道をどんどん進むと隣の尾根に出てしまい、道もはっきりしなくなったので峠へ戻る。笹の中をよく見ると、沢の方向

写真 3

写真 5

にもう一つの道があったので下ってみる。途中で倒木があり、笹が濃くなって道が判然としなくなったので、また峠へ戻る。

帰路一之宮町集落のはずれにあった農家へ寄ると、S さん（男性・78 歳）がおられ、話を聞くことができた。

S さんは猟もしておられるので山にお精しかった。峠のあたりはよく歩いており、子供の頃は峠を越えて三ツ谷の大楢谷川へ魚を釣りに行ったそうだ。そして昔宮村中で行っていた宮榾（= みやほだ・山で大量の薪を作って宮川に流し、高山森下町の山王河原で揚げて高山の町で売っていた）の話をしていただけた。

他日三ツ谷集落側から入ってみる。集落には奥の方まで大規模な牛舎が立ち並んでいた。牛舎を過ぎ、大楢谷側沿いに車を走らせる。別荘が 3 軒ほどあるところに林道のゲートあったので、ここから歩く（写真 5）。左に上逆谷が現れる。ゲートから約 1 キロで対岸に峠からの小谷が現れたので、林道から降りて谷を渡る（写真 6）。笹の中に道の形状があったので、漕ぎながら進

写真 6

む（写真 7）。ここでも途中で力尽きて戻る。

帰路集落の牛舎にいた男性 63 歳に話しかけところ、小学生の時に遠足で峠を得て宮へ行ったことがあると、話してくれた。

また別の場所の畑で大根を引いていた S さん（男性・90 歳）は、

「20 歳代のころ峠の下までよく伐採に行き、木馬道があった。こちらでは宮峠と呼んでいた。そのころは大楢谷川に橋が架かっていた」

「宮村の人が三ツ谷側の木を買って薪にし、背負って峠を越え、宮川へ流したという話を親

写真 4

写真 7

から聞いた」（前述の宮榾のこと）

「この峠は昔宮や久々野の人が、清見楢谷集落の由緒ある楢谷寺（ゆうこくじ）へお参りに行くため越えたということも聞いたことがあるな。三ツ谷から有巣峠、龍ヶ峰峠（明治以降は西ウレ峠）を越えて楢谷へ行ったそうやけど、遠かったやろな」

なお宮村から楢谷へ行くには、宮川を遡りヌクイ谷から峠を越えて赤谷へ下る道もあったようだ。

『きよみ風土記』（清見村教育委員会）には、

飛騨一宮水無神社の祭礼の時には、清見村の人が大勢峠を越えて見物に行った。また昔大楢谷川の奥に長者が住んでおり、一方峠を隔てた宮村側にも長者が住んでいた。この２軒はたいへん仲がよく、毎年お盆になるとこの２軒と両方の村人が峠へ集まって盆踊りをやったので、この峠を「おどり峠」と呼んでいた。また別名は「夜〇い峠」などと書いてある。

やはりその昔、この峠は旧清見村と旧宮村を結ぶ太いパイプだったようだ。

初出『斐太紀』31 号（2023 年 4 月 1 日）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

宮榾（みやほだ）とナタメ

太い薪材を榾（ほだ、ほた）という。

前述のように、旧宮村では村挙げて山で大量の薪を作って宮川に流し、高山森下町の山王河原で揚げて高山の町で売っていた。木材が唯一の燃料であった頃は榾の需要が多く、なかでも宮榾は質がいいのいで評判がよかった。

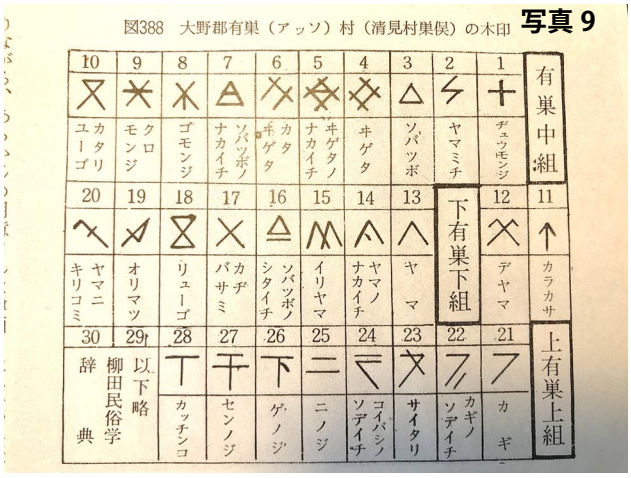
材は楢が多く、あと松や雑木で、径 10cm から 30cm のものを約 70cm の長さに切り、乾燥のため表皮を数条に剥ぐ。切ったものを棚状に積んで１年くらい山で乾燥させてから宮川べりまで運び出すのだが、この運搬作業はたいへんだった。主に女性の仕事だったという。

川の増水をみはからって一気に流し、男女とも水に入って鳶で動かす。これをカワカリといって、洪水では流失してしまうし、旱魃の時は流れないのでこれもたいへんな作業で、カワカリ時は田植えや稲刈り以上に忙しかったという。

これを下流の高山の河原で揚げて所有者別に積む。この時所有者が分かるようあらかじめ榾に刻んだのが家ごとのナタメ。

基本は（写真８）のように１サガシ ２ネジイチ ３マメガミ ４ネジ一ソウ ５イチョウバ ６一ソを元中末の３カ所に刻み、（写真９）の木印と組み合わせたという。木印は、もともと清見の有巣村で使われていたものを宮村の人が参考にした。

ナタメはおよそ 200 種類あり、家族に徹底していて自分の家のナタメを見つけて手際よく積んだというが、よく判別できたものだと感心する。見分けやすいナタメの売買もあったという。現在この宮榾のことを知る人はほとんどいなくなった。



ギフチョウ、チャマダラセセリ生息地の草刈り

松崎まみ

ギフチョウ生息地下草刈

10 月 21 日 (土) 21 名参加

清見町大原から渓谷沿いに標高を上げ約 1100m 程の松谷へ、そこは広大な笹原だった。小雨降る中カッパを着て道路の両側に広がる笹を刈っていくと立派なヒメカンアオイの株が次々と見えてくる。それの株を痛めないようにレーキを浮かせて刈った笹を集める。半日ではとても全部は刈れそうにない。

昼食後次の場所へ移動。鈴木さんが、「今までずっと行くことのできなかった谷の対岸へ渡ります。今日は水が少ないのでチャンスです。足場が悪いので渡れる人だけでいいです」と。長靴の人たちは谷を渡るが、そうでない人は渡れない。私は右足の踏ん張りが効かず流れに足をとられそうなので諦めた。女性陣も果敢に渡渉したが、長靴に水が入ってしまい足が濡れ冷たくなるのも厭わず作業を続けた人もいた。

直井さんが**「ヤチボウズ※」**(谷地坊主) がたくさんあったと教えてくれた。ヤチボウズが増えたため、ヒメカンアオイの生育に影響を与えているようだ。

作業後、すのまたふるさと学校 (清見町巣野俣) で、ギフチョウの分布の謎を解明 (通信 91 号 p4 参照) された土田教授による学習会が開かれた。採取した個体を提供した方も 2 人程参加されていた。素人にもわかりやすく説明してくださり、DNA によって解明された経緯など聴講できた。

※寒冷地の湿原では、スゲ類の大株が湿地のあちこちにかたまりを作り、盛り上がって見えるのを谷地坊主 (やちぼうず) と呼ぶ。
（ウィキペディア「スゲ属」の一部を引用）

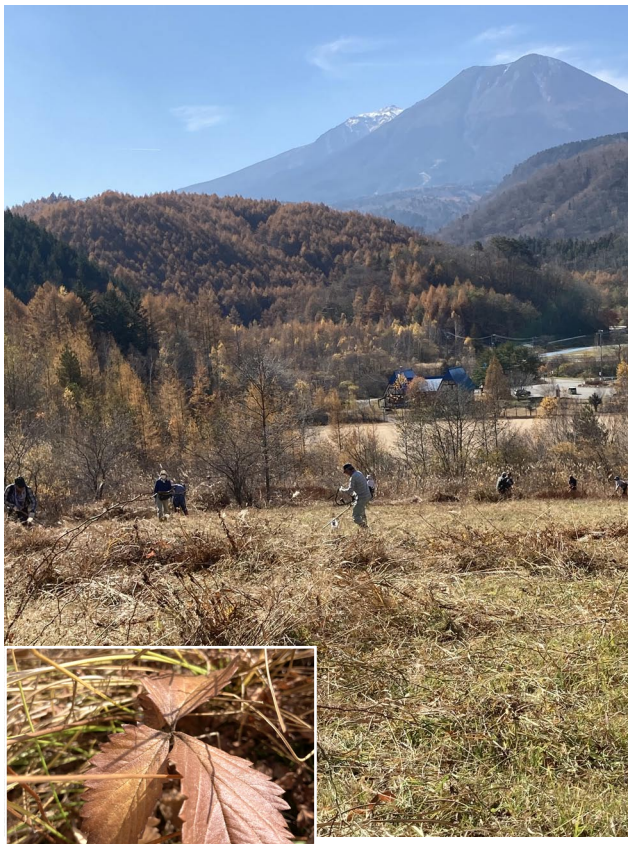
チャマダラセセリ生息地下草刈り

11 月 4 日 (土)　24 名参加

(高根町留野原→小日和田)

去年刈ったのにまた藪になってしまったと、旧スキー場跡地へ今年も向かう。低木やススキを刈ると紅葉したミツバツチグリがあちこちで顔を出した。去年は見かけなかったので、草を刈った甲斐があった。

昼食後は小日和田に移動。土手の日当たりのいい所ほどミツバツチグリがよく育つからと、土手の斜面をエンジン付き草刈り機部隊が大活躍。刈られたノイバラやススキをレーキで集めると、ここでもその下に紅葉したミツバツチグリがたくさん見られた。耕作されていない畑にもチャマダラセセリがよく出るということで、そこの草も刈りとった。



★今年も２回の保全活動に、神戸、大阪、長野、静岡、東京など各地から手弁当で参加されていた。
★草原という環境を維持することが、蝶の生息にとって大事だとしみじみ感じた。
★ギフチョウ、チャマダラセセリの写真は「飛騨地方で記録された蝶類」（鈴木俊文著、2020）からの複製。

アサギマダラ再捕獲情報

今年のマーキング会で**村安祐太さんがマーク**した個体が 11 月 14 日に鹿児島県屋久島・モッチョム岳下の道で再捕獲されました。これまでのマーキング会で放蝶した中で最も遠距離への飛行です。

移動日数：73 日　再捕獲者：久保田好則さん
移動距離：約 903km

■ 会員を募集しています！　年会費＝個人 2,000 円 家族 3,000 円 団体 5,000 円
あなたの知人、友人に入会をおすすめください
・郵便振替　00800-8-129365　　振 込 先　乗鞍岳の自然を考える会

くらがね通信 92 第号（冬号）2024 年 1 月 20 日 発行
発行者　乗鞍岳と飛騨の自然を考える会　〒 506-0055　岐阜県高山市上岡本町 4-218-3　飯田　洋
TEL：0577-32-7206・ FAX：0577-32-7207
下記 URL のページから**くらがね通信のバックナンバー**が閲覧できます。
★ http://iidalaw.net/kuragane.html
編集室では皆さんからの原稿、ご意見等をお待ちしています。
■ 編集責任者 : 松崎　茂　　E-mail : ioauregihserimus@hidatakayama.ne.jp　TEL：0577-34-4703
表紙写真提供 : 小池 潜　　印刷：山都印刷